

研究者にとって東大闘争とは？

(注：1968年6月17日/東京大学都市工学大学院タテカン/川島宏)

■東大闘争は我々の何を告発するか？

我々は現在、激烈な東大闘争を闘っている。東大闘争は決して単なる大学制度改革ではなく、学問的営為全体に対する根底的な告発として闘われている。即ち、日常的地平での研究者としての規定そのものを問題にし、「まず我々は、歴史的・社会的に規定された存在としての人間である」という観点から「研究する我々」を問い直していく。

そのことによって逆に「学問」自体の存立基盤を明らかにしていくことが実践されつつあるのだ。そしてこの過程で既成のあらゆる領域の研究は、その存立基盤に対する盲目性によって痛烈な断罪を加えられているのだ。即ちいかなる研究も決してその学問的対象の個別主義的・技術的・即自的把握をもって『研究』たる名称を僭称できないということが宣言されたのである。

研究する我々はいかにあるべきか？ その時大学は何なのか？それは自己に対する問い、更には自己の存立基盤に対する問い、—即ち『批判』の原理—を内にもたずしては研究は有り得ないのだということを我々大学人が把え返したのである。そして大学に於ける研究者とは、いや研究者一般とはこの様な『批判原理』を自己の内部に保持し、それをバネに自己の存立基盤そのものを具体的行動を以って突き崩していくことによって初めて自己を実践的に変革できるのだということが意識化されたのである。

■<聖職者意識>を<加害者意識>に転化せよ！

封鎖に反対している人達がそうであるように、自らを社会に対してあたかも第三者的・外在的な存在であると自己規定し、「科学・技術そのものは」という形で技術の普遍性(超階級性)を語ることによって、論理抜きの”「科学・技術の洗練」=「進歩」はとにかく良いことなのだ”という神話的価値づけがなされる。そしてそれらのことの近親相関的連関のもとに、科学・技術至上主義、研究者=聖職者意識が胚胎し、かくして「何はともあれ、研究者は研究を第一とすべきだし、研究の自由も保障されるべきだ」というのっぺりした研究者エゴが長子権を獲得して徘徊する。

しかし考えてもみよう。「研究者」は、とりわけ東大の「研究者」は、「何はともあれ……」と云えるように実は特権的人間ではないのか。そういった形で我々は、この社会の剰余価値によって、労働者階級の搾取される賃労働によって自己の生活を支えているのではないのか——しかも体制(資本)に買収されているという形、労働者階級に寄生するという形に於いて。ここに於いてまず我々は社会に対する直接的な《加害者》であると云わねばならない。

更に「研究者」はそういった分業形態の中で科学・技術に専念することによってますます知識の特権的独占者としての個別性・寄生性の根柢を深め、一方その知識を独占的に買収されていく。このような存在を「聖職者」と呼ぶのだろうか？むしろ矛盾を深化させる担い手として社会に対する《加害者》ではないのだろうか？そして更に工学(技術学)に於て端的にみられるように、「社会の要請」と「学問の確立」という美名のもとに、実は資本と国家権力の要請に従って大学は現実の社会における個別各専門分野の研究調査過程に介入してゆくのだが、それによって大学は、現

実の政治過程を端的に担うことになるのだし、定められた枠の中での一定の技術的成果と引換えに、科学技術の根本を問い返す自らの主体性を売り渡すのである。

ここに於いて、「研究者」は矛盾を深化させるという意味に於いて間接的にも《加害者》なのだ。いわゆる「研究の自由」なるものはこのような「研究者」の没主体性と引換えに官許のものとして与えられたものにしか過ぎないのだ。研究者は即時的にはこう言った二重の意味での《加害者》なのであって、我々が真の研究者を目指そうとするなら、我々の内部の批判的原理を自己の全存在に向けて《加害者》としての自己の否定を目指す実践的変革・社会変革を追及してゆかねばならないのだ。そうでなければ「研究者の権利」と云っても寄生者の個別的エゴへの執着に他ならない。医学生・医療労働者の闘い、従ってまた現在の東大闘争はそのことを問うているのだ。

■研究者は今こそ問われている！

では、この様な根本的原理が研究者に問われているときに、研究者が日常的研究そのものを切り取った形で遂行することが許されるものであろうか？

学問そのものの存立基盤が問題になっているときに、学問のみの自閉領域をなんの支障もなく研究しうるといふこと、これこそ我々が鋭く告発してきたところの人間的・社会的基盤を捨象した学問の退廃形式にほかならないのだ。全学封鎖闘争が具体的な課題となった東大闘争の現段階において全ての研究者は己の存在そのものを鋭く問われている。「研究の自由」の幻想の下に日常的研究に埋没する「研究者」の膨大な存在こそは、危機に瀕した東大の体制を今なお支え「8.10 告示」路線の貫徹=新旧執行部交代劇と新たな収拾策動=学生・院生・研究生・教職員の闘争圧殺を許したのだ。

全ての「研究者」はただちに日常的研究活動をボイコットせよ！

そして、自己の全存在、全活動に根底的な批判の目を向けよ！

自らの不当な存立基盤を自らの手で葬り去れ！

都市工学大学院ストライキ実行委員会